石井方式を実施するのに、最も必要な心がまえは何か。

たびたび述べていますように、「漢字を教えようと思うな。漢字で教えているのにすぎないのだ」ということです。

塀の節穴からのぞかれるのがいやで、「この節穴よりのぞくべからず」などと書きますと、かえって、のぞき見する者が多くなるでしょう。書いてなければ、見ようともしない者でも、こんなことが書いてあると、かえって何だろうという気持を起こさせます。

親や教師は、つい欲が働いて、度を過ごすのが欠点です。食べ物でも、やかましく言いすぎてかえって食欲を減退させています。おいしいものでも、口へ詰め込まれたのでは、食べる気がしなくなります。親がおいしそうに食べてみせれば、子供のほうから食べさせてと言うようになります。

漢字教育も、この字は××という漢字よ。覚えなさい」と言うのはいけません。子供のほうから、「これ、なあに」と質問し、それに答えてやるのがいちばんよろしい。

子供は、知識欲が旺盛で、うるさいほど何でも聞きたがるものです。子供は、関心をもって尋ねたものは、教えられるといっぺんで覚えてしまいます。だから、教えようとする漢字を、子供の目の触れやすい所に用意しておき、子供の関心を呼び起こす工夫が大切です。

関心が強くなかった場合、何回教えてやっても覚えないことがあります。その場合、「まだ覚えないの。もうこれで×回教えてやったのよ」と子供を責める人があります。

漢字が早く覚えられないのは、子供の責任ではありません。子供が、親の期待どおり覚えてくれないからと言って、どうして責められる理由があるのでしょう。

何回教えても覚えられたいとしても、覚えられるまでは、いつでもやさしい気持で教えてあげてください。ことに、何回教えられても覚えられない字を質問するのは、大変ほめられてよいことです。

「覚えられるまで教える」これが教育というものだと思います。それに、覚えるのに手間取るほど、覚えた時に、その記憶は強固なものになります。早く、簡単に覚えられたものは、やはり忘れるのも容易なのです。

そう思ったら、なかなか覚えない子供ほど頼もしい子供ということができます。これで 20 回め。まだ覚えてくれない。ああ、ありがたい」と思うべきです。